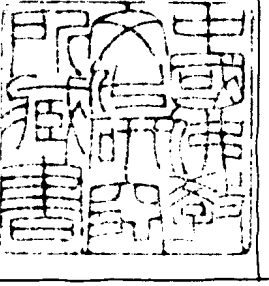
000367

弘法大師 空海全集

第四巻



筑摩書房

訳注者・解説者（五十音順）

遠藤祐純（えんどう　ゆうじゅん）
大正大学助教授

勝又俊教（かつまた　しゅんきょう）
大正大学名誉教授

真保龍敞（しんぽ　りゅうしょう）
大正大学講師

布施浄慧（ふせ　じょうえ）
大正大学講師

真鍋俊照（まなべ　しゅんしょう）
神奈川県立金沢文庫主任学芸員

村岡　空（むらおか　くう）
詩人・光明寺住職

弘法大師空海全集　第四巻

昭和五十九年五月二十五日　初版第一刷発行
昭和六十二年六月十五日　初版第三刷発行

編者　弘法大師空海全集編輯委員会
京都市東山区東山七条　総本山智積院内
真言宗智山派
宗祖弘法大師千百五十年御遠忌奉修局
代表　高野一能
編輯代表　宮坂宥勝

発行者　関根栄郷

発行所　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
郵便番号　一〇一－九一
電話　東京(291)七六五一(営業)
東京(294)六七一一(編集)
振替　東京　六－四一二三

印刷　株式会社精興社
製本　株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替致します

ISBN 4-480-77004-6　C 0315　Printed in Japan

凡　例

一　本巻には、真言密教の事相の関係、戒律、ならびに音義や悉曇について述べられた諸篇を収めた。

一　本文は二段組みとし、上段に訓み下し文、下段に現代口語訳を掲げ、各篇の末尾にそれぞれの注記を収めた。

一　訓み下し文、口語訳、訳注の作成にあたっては、長谷宝秀編『弘法大師全集』（増補第三版）を底本とした。

一　各篇の構成を分かりやすくする目的で、適宜、本文の内容を分科し、番号や行あけなどの区切りを入れたものもある。

〔訓み下し文〕

一　訓読は原則として前記『弘法大師全集』に付された訓みに従ったが、訳者独自の判断によって、訓みを改めたところもある。

一　訓み下し文は、内容に従って適宜改行をほどこし、句読点・並列点（・）を入れて読みやすくした。また、底本で二行割書きとなっている箇所は、〈　〉を付して小活字で一行に組んだ。

一　漢文の助字、もしくは副詞・代名詞・接続詞その他に相当する漢字の多くを仮名書きに改めた。

（例）夫　若　是　此　之　其　以　云　曰　言　謂　即　則　乃　又　亦　復　有　無　所　不　非　也

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

ただし、とくに意味を考えてそのままとした場合もある。

一　底本に使用されている古字・略字・俗字などの異体字は、おおむね正字体、もしくは現行の字体に改めた。

（例）漫荼羅・曼荼羅→曼荼羅　陁→陀　最→最　虛→虛　職→職　皷→鼓　耽→耽　导→碍
弃→棄　躰→体　刼→劫　虵→蛇　決→決　滅→減　妙→妙　艸→草　劒→剣　醎→鹹
梨→梨　迴→廻　懲→懲　散→散　麼→麽　況→況　刺→刺　沉→沈　慢→慢　盖→蓋
槃→海

なお、あえて通行の字体に改めなかったものもある。

（例）辯・辨（弁）　龍（竜）　廻（回）　燈（灯）　毗（毘）　慧（恵）　癡（痴）　雙（双）

一　訓み下し文のみ、仮名遣いをすべて歴史的仮名遣いとし、難読語や仏教独自の読み方をする言葉をはじめ、漢字にはできるだけ多くのふり仮名をほどこした。

一　経論などの書名には『　』を、引用文に相当する個所には「　」を付した。

〔口語訳〕

一　下段に掲げた口語訳は、上段の訓み下し文と対照しつつ読むことができるよう、できるだけ原文に忠実に、かつ平易な訳をむねとした。

一　訳文中の（　）は、文意をとりやすくするため、原文に相当するものがない語句を訳者が補ったことを示し、小さな〔　〕は、原文に出てくる術語を補って、上の訳語との関係を明らかにしたものである。また小さな（　）で挿入したものは、上の術語に対する簡略な説明であるが、一部に、必要に応じて真言の和訳を付したものもある。

〔訳　注〕

一　仏教の専門的な術語や難解な語句には、訓み下し文に指示番号を付して、各篇ごとの末尾に一括して注記を掲げてある。

一　とくに真言密教の術語については、詳しい解説を、本全集の第一巻末尾に「補注」として掲げてあるので、併せて参照されたい。

一　本文中の経論などの引用箇所の出典については、注記に『大正新脩大蔵経』の該当する巻数・頁数・上、中、下段の別を、（大正三一・一八九上）のように表示した。

一　本文に出てくる真言や、それを表記する梵字（梵語）については、注記にその原語の音を片仮名書きとローマ字で示し、必要に応じて一部にその和訳を掲げた。

本巻の訓み下し文、口語訳、訳注の作成に際し、全体を通じての訳文の体裁、訳語、注記などの若干の調整を宮坂宥勝が担当した。

目

次

凡　例……v
秘　蔵　記……勝又俊教　訳注……三
五部陀羅尼問答偈讃宗秘論……村岡　空　訳注……一〇九
三昧耶戒序……遠藤祐純　訳注……二六七
秘密三昧耶仏戒儀……遠藤祐純　訳注……二九一
平城天皇灌頂文……遠藤祐純　訳注……三三一
遺　誡（弘仁の遺誡）……真保龍敞　訳注……三五五
建立曼荼羅次第法……真鍋俊照　訳注……三六三
念持真言理観啓白文……真保龍敞　訳注……三七七
金剛頂経一字頂輪王儀軌音義……布施浄慧　訳注……三九一
梵字悉曇字母并釈義……布施浄慧　訳注……四〇五

解説……四三

第四卷 実 践 篇

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

秘蔵記

勝又俊教訳注

秘蔵記

『摩訶毗盧遮那尾三菩提美紀梨倆地瑟他蘇多覧』

両部曼荼羅

胎蔵曼荼羅〈曼荼羅とはいはく三密円満具足の義なり〉。毗盧遮那〈中台の尊なり、これを法界智といふ〉。四仏〈阿閦等なり、これを四智といふ〉。四菩薩〈普賢等なり、これを四行の菩薩といふ〉。中院の上の三角形〈これ仏母なり〉。また釈迦の眷属と中院の下の五大忿怒尊等〈已上仏部なり〉。南方〈金剛部なり〉、北方〈蓮華部なり〉、以外〈外金剛部なり〉。

1　『大毘盧遮那成仏神変加持経』

2　両部曼荼羅

イ　胎蔵曼荼羅

曼荼羅とは身体・言葉・意の三つの秘密（のはたらき）が完全に具わっている意味である。毘盧遮那は中台八葉院のなかの中央の如来であって、法界体性智である。四方の四仏は阿閦・宝生・弥陀・不空成就の四仏で、順次に大円鏡智（鏡にものが映るように、すべてのものをありのままに現わす智慧）・平等性智（あらゆるものが平等であることを知る智慧）・妙観察智（あらゆるものの差別を知る智慧）・成所作智（生きとし生けるものにはたらきかけて救済する智慧）（を表現する仏）である。四菩薩は普賢・文殊・観音・弥勒の四菩薩で、これらは四仏の修行の段階における徳性（因徳）を有し、さとりの原因・さとりへの実践・さとりを証すこと・さとりの

六 金剛界曼荼羅。法界智より四波羅蜜を流出す。これすなはち定なり。定より四智を流出す。三十七尊とは、いはゆる五仏・四波羅蜜・十六大菩薩・十二供養なり。五十三尊〈賢劫の十六菩薩を加ふ〉、七十三尊〈外金剛部の二十天を加ふ〉、百八尊〈五頂輪王、十六執金剛、十波羅蜜、地・水・火・風を加ふ。『出生義』の中に出でたり〉。

世界に入ること〔因・行・証・入〕の四つの実践体系〔四行〕が表面となっているから、四行の菩薩という。

中台八葉院の上方（東方）の遍知院は仏眼仏母尊などを列しているので仏母院ともいう。

また釈迦院と、中台八葉の下方（西方）の持明院（五大明王）等の以上は仏部である。南方の金剛手院等は金剛部であり、北方の観音院等は蓮華部であり、それ以外の四方の外院は外金剛部である。

ロ　金剛界曼荼羅

大日如来の法界体性智から金・宝・法・羯の四波羅蜜菩薩を流出する。これは定門（瞑想の部門）の菩薩である。この金・宝・法・羯の四菩薩から順次に大円鏡智・平等性智・妙観察智・成所作智の四つの智慧を流出し、その四つの智慧は順次に阿閦・宝生・阿弥陀・不空成就の四仏なのである。かくして大日如来から三十七尊が出生するのであって、その三十七尊とは、いわゆる大日・阿閦・宝生・阿弥陀・不空成就の五仏と、四波羅蜜菩薩と、四仏の四親近の菩薩たる十六大菩薩と、内なる四供養と外なる四供養と四摂菩薩とを合わせた十二供養菩薩とである。五十三尊は三十七尊に賢劫の十六尊を加えたものであり、七十三尊は五十三尊に外金剛部の二十天を加えたものであり、百八尊はこの七十三尊にさら

『金剛頂経』の四会とは、一には成身会、二には羯磨会、三には三昧耶会、四には供養会なり。もし毗盧遮那、吽字を誦したまへば、すなはち五股金剛空に現じて還つて仏身に著して、すなはち阿閦仏と成る。これを成身会となす。三十七尊の種子真言と印契とを説いて羯磨会となす。三昧耶の真言と印契とを説いて三昧耶会となす。供養の儀式を説いて供養会となす。これを金剛界四会曼荼羅と名づく。

四種曼荼羅

一には大曼荼羅〈五大なり。いはく絵像に五頂輪王と十六執金剛と十波羅蜜菩薩と地・水・火・風の四天を加えたものである。これらの説は『金剛頂瑜伽三十七尊出生義』に出ている。

3　〔金剛頂経四会〕

『金剛頂経』の四会（四つの曼荼羅）とは、一には成身会、二には羯磨会、三には三昧耶会、四には供養会である（そのうち成身会は、五相成身観または種子・三昧耶形・本尊〈種・三・尊〉転成観によって即身成仏することを説くことである）。そこで大日如来が吽字を誦えて自心を観想し（これは(1)通達菩提心と(2)修菩提心で、種子の位）、本尊の三昧耶形たる五股金剛杵が空中に現じ（これは(3)成金剛心）、それが仏身に著して（これは(4)証金剛身。ここまでが三昧耶形の位）、阿閦仏となる（これは(5)仏身円満で、尊形の位）。これが成身会である。

次に三十七尊の種子・真言と印契とは法智印とすることが普通であるが、ここでは説法教化の活動と見て羯磨会という。次に三昧耶の真言と印契とを三昧耶会という。次に供養の儀式を表現したものを供養会という。以上を金剛界四会曼荼羅という。

（金剛界九会曼荼羅は説かれていないが、注記に示した）。

4　四種曼荼羅

一には大曼荼羅とは地・水・火・風・空の五つの粗大な物質的要素

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com